はらっぱ

令和６年２月２１日
山形市立南沼原小学校
学校だより　第10号
文責：校長　石澤　友章

来年の南沼原小　まかせたよ！　～児童会引継ぎ～

児童会活動は「自分たちのくらしを自分たちで創る」ことを学ぶとても大切なものです。本校の児童会活動をけん引してくれた６年生から、次の最高学年である５年生へ引継ぎが行われました。あいさつ運動をはじめ、すべての委員会で真摯に働いた６年生。代表委員会では常に言葉を吟味しながら、活発な意見を出し合う姿は、また一つ新たな伝統を築いてくれたと思います。その６年生の委員長から、ファイルと共に思いを引き継いだ５年生の新委員長の皆さん。一人一人ステージ上で決意を述べる姿をとても頼もしく思いました。活動に悩んだ時は今の６年生の姿を思い浮かべて頑張ってくれることを期待しています。

「子どもの育ち」を考える　～新入学児童保護者説明会より～

新入学児童保護者説明会の折に、「子どもの育ち」について話をしました。内容は私自身の子育て中に、心のよりどころにした精神科医　明橋大二先生の著書から、今も大切にしている言葉や考え方を紹介したものです。ここに、その内容を一部掲載いたします。

「甘えない人が自立するのではなく、甘えていいときにじゅうぶん甘えた人が自立する」

「甘え」とは「依存」、**「反抗」**とは「自立」のこと。この２つを行ったり来たりしながら子どもの心は大きくなります。自立の反対は甘えなので**「甘やかさないことが自立」**と思われがちですが、自立のもとになるのは意欲です。意欲のもとは、安心感です。安心感はどこから来るかというと十分な甘えからです。甘えから出た安心感が土台となって、意欲となり自立に向かうのです。

甘え → 安心感 → 意欲 → 自立

つまり、**甘えない人が早く自立するのではなく、甘えていいときに、十分に甘えた人が自立する**のです。逆じゃないかと思われるかもしれませんが、自立につまずく子どもを見ていると、小さいとき、甘えていいときに甘えられなかったと言うことが多いのです。**小学生のうちはじゅうぶんに甘えていい時期です。甘えていいときにしっかり甘えた子が、しっかり自立する**のです。

甘えは、一言で言えば、相手の愛情を求めること。甘えが満たされるとき、自分は愛される価値のある存在なんだ、と感じます。相手に対する信頼と、**自分に対する信頼（自己評価）**が育ちます。それが、安心感につながります。相手を信じることのできる人は、思いやりをもち、深い人間関係を築くことができます。　（明橋大二著：「子育てハッピーアドバイス」より引用）

※これからも学校だよりで「子育てハッピーアドバイス」等から「子どもの育ち」のエッセンスを、随時紹介していきたいと思います。次回は **「甘えさせる」と「甘やかす」のちがい** を予定しています。

たくさんの愛に支えられて　～物心両面の支えに感謝いたします～

～その１　山形職業能力開発専門校の皆さんより

本校の西側にある山形職業能力開発専門校の建築技術科訓練生の皆さんから、木製のベンチをいただきました。訓練生の方が実習で使用した県産木材の廃材を利用したものです。木をふんだんに使った本校のために、そして県産木材の良さや建築技術への興味を持ってもらいたいという願いが込められています。全校生を代表して６年生の計画委員の皆さんが受け取り、座り心地を確かめました。今後、校内でみんなに使ってもらえるように設置していきます。

～その２　吉原財産管理維持会　様より

吉原財産管理維持会様より、学校新築のお祝いに大型テントを寄贈していただきました。いただいたテントは、３ｍ×６ｍのものが２台と３ｍ×３ｍのもの１台の計３台です。アルミ製の支柱で、運びやすく設営も手軽にできる大変便利なものです。運動会などの行事はもちろん、６年生が参加する陸上記録会の時などにも活用できそうです。

～その３　絵本作家　よこたひさし氏より　　（東海林 PTA 副会長様を通して）

PTA 副会長の東海林様のご友人の関係から、絵本作家よこたひさし氏より**「ねこのまぁるいやくそく」**という絵本を寄贈していただきました。絵本のテーマは「猫の殺処分を通して命を考える」です。

犬や猫を飼ってみたものの、しつけができない、いうことを聞かないからかわいくない等の理由で飼育を放棄し、あげくに捨ててしまう飼い主が後を絶ちません。私自身、３年ほど前から犬を飼い始め、すっかり家族の一員として可愛がっている日常を過ごしているため、そのような現実を見聞きすると心が凍ります。

保護犬として、新たな飼い主との巡りあわせがあればまだ救われますが、そうでない場合は命を絶たれる、いわゆる「殺処分」となってしまいます。ちなみに山形県は、動物愛護管理推進計画を策定し、犬猫の致死処分の減少を目指して様々な施策に取り組んでいるそうです（例：犬猫の返還の促進や譲渡会の開催等）。こうした取り組みの結果、令和３年度の処分数は、10 年前と比較して、猫で 2,579 頭から 98 頭と大きく減少し、犬では 156 頭から０頭と「殺処分ゼロ」を達成するなど全国最少レベルとなっているそうです。よこた氏は、父親が同僚の飼い犬を引き取ったことから始まり、ほぼ犬と共に人生を過ごしてきたそうです。その過程で、理不尽な扱いを受ける犬猫の多さに憤り、「動物の命を捨てるという選択肢が人間の頭の中から消えること」を常に願って作品作りを行っているそうです。この絵本と出会った子どもたちが、真剣にいのちと向き合う人になってくれることを願っています。